（主として思想戰・科學戰）・經濟戰を伴ふが、取分け、長期戰になると、これ等武力戰以外のものが、有力なる戰爭の手段となり、その中でも、思想戰は最も重大なる地位を占めることになるのである。

第一次世界大戰に於て、露國や、武力戰で勝利を獲得し續けた獨逸の崩壞したのも、思想戰の結果であり、最近獨伊兩國の急激なる勃興もまた思想戰における勝利の結果にして、ヒットラー及びムソリーニ兩氏は、「民族國家社會主義精神」及び「ファシスト」精神をもつて赤化に瀕する祖國を救へるものなること、周知の通りである。

思想戰も、今と形態は異つて居るが、往昔から既に存在したことで、隱密・反間卽ち現時の第五列部隊を敵國人民間に潛在せしめ、好機を捕へ、領主の惡政を宣傳せしめ民心を離反せしむる等は、我國の戰國時代にも常に用ゐられたことである。日露戰役當時明石大佐（後の大將）が露國の革命主義者を巧に驅使し、敵國內の壞亂に成效したのは、當時喧傳せられたことである。又第一次世界大戰當時、獨逸はレニン一派の過激派を封印列車により露國に送りつけた結果、敵國の疲弊せる人心に急劇なる變動を來し、武力戰に任ずる將兵の間にも、忽の間に反戰思想を植附け、又に衂らずして、東方を席捲し、須臾にして、ブレスト・リトウスク條約を締結し、專ら力を西方戰場に用ゐ得るに到つたのである。又佛英空軍は宣傳ビラを撒き、前線及び敵國內の思想攪亂を企てた。一九一七年の秋頃には、その宣傳力が著しく加はつて來たので、獨逸國內には、逐次思想的不安が漲つた。加ふるに、東部方面からは、露西亞國を一變せしめた赤化思想が恐るべき勢を以て侵入し來り、獨逸は戰線よりも、國內の精神團結から崩壞するに到つたのである。

斯かる思想戰の效力は、第一次歐洲大戰に於て相對峙して死活を爭つた孰れの强國にも深刻に體驗せられたところである。そは平和時代までも繼續せられ、平戰兩時を通じて國際間の有力なる鬪爭武器となつた。

卽ち先づ帝政露西亞を解體させると共に、獨逸をして敗戰を嘗めさせた赤化思想は、一時、全世界の思想を風靡した。現在に於ても、亞米利加・メキシコ等は中々その勢が旺んであり、英國も敵國內の攪亂にそれを利用して居る。それは極めて多くの國家間並に國家の內部に思想上の對立を生ぜしめ、國內相剋若しくは國際間の反撥を惹起せしめて、國家を崩壞に導き、橫に世界を統一せんとする邪心を孕んで居り、猶太人の結盟團が、蔭に潛み、世界的に活躍して、その謀略を逞うしてゐるといはれて居る。

云ふまでもなく、本第二次世界戰爭は强力なる思想戰に根ざす武力戰であり、實に世界觀の執拗强靱なる鬪爭である。從來、樞軸側の有力國たる日獨伊三國は、思想上に於ける二大思想卽ち自由主義と共產主義に最も惱まされ續けて來た。前者は國家や民族の結束を軟弱化せしめ、後者は深刻なる國內の相剋鬪爭を惹起せしむるが故に、國家を勞せずして滅亡せしむる絕好の手段である。そして之に對抗して起つたものが獨伊の全體主義であり、我國に於ては古來の皇道が之に對して勃興し、皇國に歸れの絕叫となつたのである。

今日、日獨伊の支那・米英等に對する戰は、單にそれ等の國に對する戰ひでなく、舊主義・舊秩序に立てる歐米全部の國々をくるめての戰ひである。而かもその實際は、赤化及び自由主義化に對する皇道顯現若くは全體主義昂揚の精神戰が廣く大きく强力に展開されて居るものと見なければならぬ。是れ卽ち今次の大戰が世界人類思想建直しの根本的思想戰なりと云はるる所以

である。

さて、吾人は、之に對し、如何なる覺悟を持すべきか。そは他なし、世界に於ける人類の持すべき本然の思想に覺醒し、そを堅持し、自國と世界の歴史を十分に體得することである。そのとき、止むに止まれず進むべき道が自ら明かにせられること、疑ふの餘地なき所なるが、これ卽ち日本皇國民の依るべき道である。假りにも、うつかりして、巧妙なる謀略に乘ぜらるるが如きことがあつてはならぬこと、云ふまでもない。

『三、敵產、敵資、特に歴史的記念物、文化的諸施設の保護に留意するを要す。

徵發、押收、物資の燼滅等は、總て規定に從ひ、必ず指揮官の命に依るべし。』

明治天皇御製

人の世のただしき道をひらかなむ
　虎のすむてふのべのはてまで
ちよろづの民の心ををさむるも
　いつくしみこそ基なりけれ

明治三十三年の北清事變は、北支那に於ける日本軍及び歐洲各國軍の軍紀展覽會場の感があつた。當時日本軍は最初福島安正少將之が指揮に任じたが、取分け正義感に厚き將軍の嚴戒により、秋毫も敵の資產等を犯すものなかりしに反し、外國軍の中のあるものは、何れも爭うて、目ぼしき寶物・什器・其の他凡百の範圍に涉り掠奪を擅まにし、且つ婦女子を姦淫する等、諸種の暴行を働きしを以て、支那國民の間の聲望が頓に低落せることがあつた。

前にも言及した通り、戰爭は敵の邪念を討滅してその反省を促し、正道に復らしむるに在る。徒らに敵國の物資財產を破壞することは、固より其の本旨ではない。公私の建造物、資產、就中史跡、歷史的記念物及び文化的諸施設に對しては、努めて保護を加へるやう、特に注意することが必要である。

支那の首都北京は、明治三十三年北清事變に於て、我軍の注意により、兵燹を免れた。又昭和十二年支那事變勃發當時、我軍は、北京城包圍の態勢既に成り、全市を一擧に壞滅せしめることも容易であつた。若し當時、通州事件に憤激せる我軍により攻擊が加へられたならば、幾萬の人命と幾多の由緒ある舊跡と永年に亙る文化的所產とは一朝烏有に歸したことと惟はれるも、幸に我軍の絕大なる配慮により、平和裡に開城することとなり、北京が今日の盛況を保てるは、世界文化の進展上悅ぶべき極みである。

此他、南京攻略の際中山陵の保全に格段の注意が拂はれ、山西省大同の石佛が保存せられたのも、之と同じく、日本軍の深甚なる配意によるものである。今次支那事變や大東亞戰等に於ける日本軍の爆擊が、敵軍事施設のみに限られ、其他に危害を及ぼさざることに終始格段の努力が拂はれたるは、周知の通りである。

元來、掠奪或は放火等は、軍人精神の透徹を缺き、教育・訓練及び躾の不充分なると、志氣の弛緩とに因るもの多かるべきも、中には、如上に關する明確なる知識なき爲と、戰地では少しの事はやつても良い、許されるだらうといふが如き淺薄なる憶斷によるものも蓋し尠くなかつたであらう。故に徵發・押收・燼滅等は總て規定に從ひ、指揮官の命令によるべきものにして、苟も法規を無視し命に依らざるときは、犯罪として處斷せらるべきことを、豫め克く知悉せしめ、且つ初期に於て斷乎其の萠芽を絶滅せしめねばならぬ。而もそれは世界新秩序建設の爲めにも、尤も重要なる事項の一つである。

『四、壯年戒むべく愼むべきは、酒色に在り、物慾に動かさるる如きは、恥づべき沙汰の限とす。』

明治天皇御製

人みなのえらびしうへにえらびたる
　玉にもきずのある世なりけり
みがかれて光そひゆく石をしも
　昔の人は見しらざりけむ
たづしくも生ひしげらせよ教草
　をとこをみなの道を別ちて

少壯の時、之を慎むは酒色にある。まして軍務に服する身、就中、嚴肅なる戰陣間に酒色を思ふが如きは、言ふ迄もなく、奉公心なき明證にして、末代迄の恥辱である。古來大酒の爲不覺を取りたる武人寡からず。我酒量をはかり、其の度を過ごさざるやうの心掛が肝要である。然るに、戰時に於ける犯罪や思はざる失敗の大部分がその當時飲酒しあるものなることは、極めて顯著なる戰史上の事實にして、指揮官として大に留意すべき點なると共に、各人に於ても、深く自ら戒めねばならぬ。特に酒癖者に對しては、一層の注意を拂ひ、幹部の嚴格なる指導と戰友の懇切なる誘掖とに俟ち、只管奉公の道に邁進せしめねばならぬ。「酒は氣違水なり」とは古人も言へる所、我・人共に深く留意せねばならぬ。

又軍人、取り分け、戰地の軍人が色慾の爲身を過るが如きは、恥づべき極み沙汰の限と言はねばならぬ。況んや婦女子に對する凌辱の如きに至つては、軍の威信を損し、住民の怨嗟を買ひ、累を戰爭の遂行に及ぼすこと、測り知るべからざるものがある。上下相戒飭し、假初にも斯かる失態なきを期せねばならぬ。

我が國の有名な武將は、家訓・誡・覺書等に於て、如上の戒につき、言及せざるものはない。左にその一二を擧ぐれば、

楠木正成家訓

一、酒を飲むとも飲まるるな。

德川光圀壁書

一、苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。

一、慾と色と酒とをかたきと心得べし。

伊勢貞丈家訓

一、酒は氣ちがひ水也、酒に醉ひみだれて氣違になり、人の前にてはぢをかき、喧嘩口論して人をなやめ、自分も疵をかふむり、樣々のわざはひをし出し、身をうしなひ、我をほろぼす也、つゝしむべし。

一、色と女にまよふ事也、……智慧ある人も女にはまよひやすし、つゝしむへし。

等である。余は、之が爲には、先づ志氣を振起し、上下心を併せて、酒色に優る高潔なる悅樂と遠大なる眞理想の追求とに向ひ邁進せねばならぬ如き氣風を馴致することが、何よりも緊要ではないかと考へる。之に就ても、それが、隊長以下各級幹部の率先躬行と熱誠にして氣力ある隊員との協力一致の誘掖指導に俟たねばならぬこと言ふ迄もない。

『五、驕傲は損を招き、激怒は悔を後日に殘すこと多し。深く箴めざるべからず。』

明治天皇御製

天てらす神のみいつを仰ぐかな
　ひらけゆく世にあふにつけても
むつまじく枝をかはしてさく梅も
　さかりあらそふ色はみえけり
天をうらみ人をとがむることもあらじ
　わがあやまちを思ひかへさば

ことのはにあまる誠はおのづから
人のおもわにあらはれにけり

激情の發動は、驕傲に根ざし、飲酒に伴ふことが多い。茲に於て、酒の害益〻大なりと言はねばならぬ。

軍隊は經歷及び出身を異にせる多人數の集合なるを以て、稍もすると、成員間に種々の摩擦があり、時としては下のものに對する凌虐があり、相互間の爭鬪がある。況んや、戰地の殺氣立てる狀勢は、自ら人心を苛ら立たしめ和ごやかなる感情を荒廢せしめ、一旦の激情に依り、前後の思慮と分別とを失はしめ、延いて、喧嘩・口論・侮辱・暴行・傷害等の非行を生ずる場合絶無ではない。敵に向くべき刃を自己の心得違から上官・戰友に向くるが如き事態の發生は誠に遺憾の極みにして、徒らに戰力を消耗し、敵國民の輕侮を招くに到るであらう。深く戒めねばならぬ。左に古來名將の訓戒を掲げやう。

武田信玄家訓

一、心に物なきときは體泰かなり。
一、心に我慢ある時は愛敬を失ふ。
一、心に慾なき時は義理を行ふ。
一、心に私なき時は疑ふことなし。
一、心に驕なき時は人を敬ふ。
一、心に誤なき時は人を畏れず。
一、心に貪なき時は人に諂はず。

一、心に怒なき時は言葉和らかなり。
一、心に堪忍ある時は事を調す。
一、心に曇なき時は靜かなり。
一、心に勇ある時は悔ゆることなし。
一、心に迷なき時は人を咎めず。

石川丈山家訓

一、同僚の交り常に溫和に致し、無禮なき樣に慇懃を可存候、併し不善の人には交り候事必ず無用の事。
一、人と物爭可レ令二停止一候、無益の事は負けて居り可申候。

かの赤穗藩主淺野長矩は、忍び難き侮辱なりしとはいへ、殿中役儀の身に、も係らず、吉良義央を刄傷したるため、その身は切腹し城地は沒收せられ、家中一統四散したのであるが、大石內藏之助は世の嘲罵や愚弄を忍び、時としては同志の迫害をも蒙らんとしたが、克く之に堪え忍んだればこそ、やがて美事に復讐の大事を仕おふせたのである。

又德川家康は、部下に與へた箴言中

「……堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ。……己を責めて人を責むるな。……」

と戒めたが、千軍萬馬の間を往來し、幼時より辛酸を嘗めたる家康の言として、千鈞の重みがある。

第二　嗜

『一、常に大義を肝に銘じ、心志健實にして、武德の實現に專念すべし。』

明治天皇御製

ちはやぶる神の心にかなふらむ
　わが國民のつくすまことは
弓矢とる國にうまれしますらをの
　名をあらはさむ時はこの時

大義とは呼んで字の如く大いなる義にして、大君に殉ずる大精神である。卽ち一個人や一方面や特定の人々にのみ關係することでなく、元首の爲、延いては世界人類の爲め尤も必要とする「つとめ」である。かくて軍人としては、何よりも先づこの大義を肝に銘じ、造次顚沛にも忘るるが如きことあつてはならぬ。言ひ換へれば、大義こそ、軍人精神の中樞であり、あらゆることに對する心志の健實味も之から導かれ、之により維持せられるのである。そこで、之が爲め、平素如何に心掛くべきや。

之がため、軍人は常に武德を養ひ、その實現を以て、念とせねばならぬ。「武德」とは、一口に云へば、「健全なる大和」を保合する根源である。人が「まこと」の包藏者たることは前にも說述したが、この「まこと」は靈妙にして不可思議の力を有し、不斷の活動を續けて居る。それは、常に仁愛の

實現に當つて居る。これは又同時に、內外よりする障害や壓迫に對する抵抗力であり、不撓不屈の彈力であり、一切の不正・非理・虛僞に對して不斷の爭鬪を覺悟し、準備し、要すれば猶豫なく其實行に任ずるが、而かも弱極に於ては必ず對手を活かす働となるのを常とするが、かくの如きもの、是れ卽ち眞の武德そのものに外ならぬ。

かくて、我等は常に、武德の修養と體得とを心懸け、その實現を以て日常の心懸とせねばならぬことが克く分る。更に之を他方より別言せば、武德の實現そのことが、實際上は武德の修養と體得とになるのである。之によるも、不言實行を立て前とする古武士の心懸と嗜とを見ることができる。

『二、居常衞生を重んじ、身心を明朗ならしむべし。』

明治天皇御製

みちみちにつとめいそしむ國民の
　身をすくよかにあらせてしがな
あさみどり澄みわたりたる大空の
　廣きをおのが心ともがな
國の爲いくさのにはにたつ人に
　仇なすやまひふせぎてしがな

今回の大東亞戰爭に於ては、氣候風土も從來の土地とは著しく異るも、幸

に衞生部の注意と各部隊の心懸とにより、衞生狀態極めて良好なりとのことなるが、こは各方面の戰鬪が順調に進捗しつつある重大な原因の一つなりと惟はれる。

余は陸軍出身の初に當り、暫く脚氣病の爲入院して居つたが、當時臺灣より後送されたものの多數の語る所に依れば、マラリヤ、脚氣病尠なからず、殊にその澎湖島方面に向へるものの間にはコレラ病患者續出し、之が爲め戰鬪力に多大の影響を及ぼせりとのことであつた。

敵彈雨下の中を猛然突擊に轉じ、敵壘に突込みて護國の華と散るのは武人の本懷であり、鄕黨、家門無上の名譽なるも、戰地に於て所屬部隊を離れ病蓐に呻吟する程、悲慘にして、殘念のことはない。それも、暴風雨泥濘中に在りて幾日か敵と對陣するとか、已むを得ず不衞生の所に連日露營せねばならなかつたとかの、免れ難き原因から病氣となるのはまだよいとしても、自己の不衞生・不節制・不注意から、罹病したとせば、此上なき恥辱たるのみならず、自隊の戰鬪力を減耗して戰友に迷惑をかけ、大君の御楯としての御奉公を缺くことになるのであつて、誠に申譯なき次第である。

一度び入隊して大元帥陛下の御楯たる光榮に浴する以上、我身は我身にして我身にあらず、その日より君國に捧げたるものなるを惟ひ、假りにも、自己の怠慢や不注意から不識の間病魔の犯す所とならざる樣、全幅の努力を致さねばならぬ。

『三、經濟戰又近代戰の特色たり。

常に自己の體勢を整へ、敵性謀略を看破し、斷じてその弄する所となる勿れ。』

明治天皇御製

打ちさしてまもりながらにほどふるは
いかなる手をか思ひめぐらす
岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の
水のひびきも世にはきこえじ

經濟戰も亦、形や辭は異るも、その實質は往古から存在して居つたのである。現時の經濟封鎖は、往時は兵糧攻め等の形で行はれた。

經濟戰は現時、その部門及び種類が增加して居り、その中には、資源戰・食糧戰・商業（貿易）戰・產業戰等があり、又その重要要素として勞力戰・金融戰・交通戰・通信戰等があるが、之等は平戰兩時を通じ熾烈に行はるるもので、實に近代戰爭の一大特色を形成するものである。

經濟戰の尤も必要なる眼目は、敵の打つべき謀略を豫め看破し、我は之に先んじて、それに應ずる手段を考慮し、着々それを實現するに在る。

而してその目標は永續する自給自足であると同時に、敵をしてそれを困難ならしむるにある。之が爲には、先づ我の體勢を確立し、敵をして乘ぜしむる手段なからしめねばならぬが、これが爲には敵を知り己を知り、世界の大勢と時勢の動きに察し、かくて萬般を綜合して判斷せる結果に基き、打つべ

き手を遲滯なく打つべき所に打たねばならぬ。

經濟戰は近代に到り、思想戰とからみ合ひ、漸次複雜廣汎多岐のものとなりつつあるが、その全般は、とても、この小冊子では述べられぬから、こゝでは單にその重要性を述べ、一般の注意を喚起するに止めて置く。

『四、武力使用の目的は善の實現ならざるべからず。兵器・資材・馬匹等之が爲に尊し。

須らく、その使用を愼み、之を尊重愛護すべし。』

明治天皇御製

水をさへみづからかひてもののふは
　手馴の駒をいつくしむらむ
しるべする人をたよりにわけいらば
　いかなる道かふみ迷ふべき

前にも述べた通り、武力使用の目的は善の實現でなければならず、從て、

之に使用せらるる兵器・資材・馬匹等が尊くなるのである。

抑〻戰力の保持發揚上、馬匹・兵器・資材等尊重愛護の必要なるは、各方面より强調せらるる所にして、多言を要せざる所なるも、余は、軍人精神涵養の方面よりも、軍人の嗜として、特に此事の尤も切要なるを强調せんと欲するものである。

馬匹が古來無言の戰士として絶大なる功績を顯はせること、言を俟たない。近來は鳩竝に軍用犬が戰場に於て偉功を奏せし實例枚擧に暇なき所である。一方、軍の裝備が日を追うて機械化の一途を辿れる結果、近代戰の勝敗が軍機械化の精鋭なるか否かにより、左右せらるること、亦事實である。斯くて、軍隊の人的要素と共に、如上の馬匹・兵器・資材等が戰力の强弱に對し、極めてその重要度を增大するに到れること、言ふ迄もない。此點よりするも、此等の愛護が極めて切要なるは、想察に難くない。而も、余年來の所信によれば、動物もある意味よりせば、却て人に比し、より忠實なる生一本の戰士であり、機械亦生命を有する活戰士とも云ふべきものと考へる。兵器には、少くも創案者の絶大なる精神や、製造者純情の籠れる魂がその全部に滲透して居るものと見得べく、斯くて、此等考案者及び製作者の精神力や魂が使用者の手を藉り、戰場で戰ひつつあるものといふことができる。乃ち知るべし、吾人が苟も此等動物や兵器・資材の使用を委托せらるるに當つては、先づ之を大切なる被委托物であり且つ自己戰力の附與者なりとして敬重し、所用に當りては其全能力を發揮せしむる爲め、豫め十分にそれ等を保存愛護し、而してその使用に際しては、之を適時適切なる場面に活用し、其の全能力を遺憾なく發揮せしめざる可らざることを。是れ抑〻其等に對する使用者の義務

にして責任でもある。馬匹や鳩や軍用犬は人の如くもの言はざるも、又兵器資材は何等の表情を現はさざるも、若し使用者の怠慢や放任や尙又虐待により或はその手入取扱を誤れる爲め、いよ〳〵といふ場面に際會し、充分なる働が出來ず、或は破損すべからざる時期に破損し又は無益に敵火の洗禮に浴する等のことありとせば、彼等は神に對して、その取扱の不法なるを訴ふるに到る可く、その審判の結果が多大の損害又は失敗の事實により報ひらるべきこと、想察に難からぬ。斯くの如きは、誠に申わけなき極みと云はなければならぬ。

上原元帥は、工兵監たりし時、工兵教育には周到に注意せられたが、その時第一に言はれしことの一つは、器材の手入・整備といふことであつた。それがため、當時から工兵隊の器具・材料はよく整備せられ道具は皆ぴか〳〵として居つた。これ等の精神が傳統せられて、ジョホール水道の渡過作戰も美事に成功したのである。

嚴寒の土地では、少し油斷すると、モーターの冷却用水が凍結し、之が爲に機械が破損するのみならず、さあといふとき中々發動ができず、みすみす急場のまに合はぬことがいくらもある。之等こそは飛行隊や戰車隊・自動車隊勇士の人知れざる苦勞の種であるが、之を終始油斷なく見事に突破してこそ、赫々たる戰果も得られるのである。

『五、軍人に最も切要なるものは、道德の實行なり。須臾も忘るべからず。敵國の住民に對しては、溫和を旨とすべし。苟も戰勝に誇り、凌虐の所爲あるべからず。抵抗力なき敵を憐むべし。鹽を敵に贈れる古武士の雅量また重んぜざるべからず。』

明治天皇御製

國のためあだなす仇はくだくとも
　いつくしむべき事な忘れそ
おのづから仇のこころも靡くまで
　誠の道をふめや國民

いつくしみあまねかりせばもろこしの
　野にふす虎もなつかざらめや

前にも云へる如く、將來眞に許さるべき戰爭は、人類と世界とに眞の大和を實現せしむる爲のものでなければならぬ。かくて戰爭の目的は道義の貫徹にある。從て又道義の實行が軍人にとり、最も切要になるのである。戰ひは、いつでも、我に抵抗するものに對し、已むを得ず、戰はるる態度でなければならぬ。

かくて、前にも述べたが、敵國の住民に對しては、溫和を旨とすべきこと、云ふまでもない。苟も戰勝に誇り、凌虐の所爲あるが如きは、恥づべき沙汰と稱せねばならぬ。

天皇御仁慈の大御心が、敵國民は勿論敵國の兵にまで及ばせ給ふのは、誠に畏き極みである。往年旅順の攻城に於ても、多くの敵兵が異域に斃るるのをいたはらせ給ひ、特に攻撃前敵將に對し開城を勸告せしめられしは、有名な事實である。今回シンガポール攻城に際しても、亦然りしやに傳承する。此の場合日本軍當面の相手は、飽くまでも戰意を有する頑敵であつて、一般住民は固より、既に戰意を失つた傷病兵や投降兵ならざること、勿論である。

服するは擊たず、從ふは慈しむのが、日本皇國の大精神である。

昔し楠正行は、敵將山名、細川の軍と瓜生野に戰つて、これを擊破し、逃ぐるを追つて天王寺方面に至つた。その勢、疾風枯葉を捲くが如く、遁走する敗兵は狼狽の極、渡邊橋から河中に墜落する者、數知れざりしが、正行はその慘狀を見て、不憫の情に驅られ、「あれを助けてやれ」と部下に命じて、一人殘らず救ひ上げ、衣服を與へ、食物を給し、負傷者には手當を加へ、騎馬武者には馬を與へて、それ〴〵の敵の部隊へ歸らせた。その仁愛に感ずるの餘り、彼等の中に、止まつて正行の麾下に加はり、後四條畷の決戰に奮戰激鬪して、死を遂げた者も少なからざりしとのことである。

これ卽ち、堂々たる眞武士の所行である。敵兵に對してすら然りとせば、況して罪なき住民に對しては、この心もて對處せねばならぬこと、言ふ迄もない。

支那事變に於ても、取分け大東亞戰に於て、日本皇軍のこの仁慈に感激せる餘り、土着民の如きは、今では全く皇軍に心から懷いて居るといふことであるが、これは「仁義に刃向ふ刃なき」を如實に實證せるものである。

昔し上杉謙信は、武田信玄と連年死鬪を繰返しつつある最中、ある時、今

まで鹽をみつぎありし、北條領内のものが武田方の士庶に對しその輸入を禁ぜし爲め武田の上下が困窮しある事情を聽きて、氣の毒に思ひ、自國産の鹽を敵人武田方に贈り、その生活必需品不足の急迫を救つたが、こは戰國時代の美談である。

『六、「まこと」は人の最全の美德なり。武勳に誇らず、謙讓にして、修養と鍛錬とに勤しむもの、是れ武人の高風なり。』

明治天皇御製

とき遲きたがひはあれどつらぬかぬ
　ことなきものは誠なりけり
思ふ事おもふがままに言ひいづる
　をさな心やまことなるらむ
まへになりうしろになりて雛まもる
　たづの心のあはれなるかな

ならび行く人にはよしやおくるとも
ただしき道をふみなたがへそ

前に述べた通り、「まこと」は宇宙（天地）の大道にして、亦人道の極致である。かくて、「まこと」が人の最全の美德なること、言を俟たぬ。宜なり畏くも、明治天皇が軍人勅諭の末段に於て、特に

右の五ケ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ケ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ケ條の精神なり心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あれは何事も成るものそかし……

と御諭しになつた所以なりと拜察する。

謙讓は人の美德にして、慢は損を招き謙は益を受く。教育勅語にも「恭儉己を持し」と宣はせられて居る。歴戰者の功績を誇り顔に吹聽する程見苦しいものはない。而もこは時として陷り易き通弊である。我、人共に戒心せねばならぬ。

眞の功あるものは、却て謙遜なるが、そは「まごころ」の保持者たるを以てである。否な、「まごころ」の保持者なればこそ、有數の功績も立て得たものに外ならぬ。彼等は何事も、神樣の御蔭であり畏くも　天皇の御稜威によるものと深く信ずるが故に、絶大の勳功にも我がこととして誇る心持が出ないのである。

尙又、之が爲め、何事も他人を先に立て、禮儀を亂さず、己はへり下りて、人の功を顯はさんと心懸くべきである。さすれば決して爭ふ心も起らず、よ

く寸功の前に謙虚たる心持になれるのである。「武士の禁物は大酒と自慢と奢なるべし」との古來の諺もある。

乃木大將は難攻不落の旅順を陷落し、宸襟を安んじ奉られたが、深く攻城間に戰死せる將士の身の上に思を致され、その人々の父兄妻子に對し、尙又國民に對しても、如何に詫びても盡きないといふ心持で居られたのは、將軍の平素を知れるものの知悉せる所であり、「何の面目あつてか父老に見えん」の有名な詩句が、端的に「まこと」の權化たる將軍の心中を物語つて餘りある。

近時、歸還せる將士が概ね謙讓にして、自己の功を誇らざるは、特に感ずる所なるが、これは教育の徹底せる證據にして、悦ばしき極みである。

自ら省みて眞に我が誠の足らざるを思へば、我を高しとし優れりとし人を嫉み惡むこともない筈である。之等は銃後に於て否な總力戰のあらゆる部面に於ても、徹底せしめたきものである。眞の和も、總力の眞の發揮も、要はこの一つの「まこと」の有無によるものと切思する。

結び

今や、劃期的なる世界の大轉換期に際會し、「戰ひ」も亦、斷じて轉換せられなくてはならぬ。

斯くて、各國家、國民及び各國軍、皆、競ひ進んで、「善」の實現に向ひ邁進奮鬪すれば、在來の戰爭茲に終を告げ、世界は一轉して樂土となり、たのしき人生を現前するに到らう。

明治天皇御製

國民のひとつごころにつかふるも
みおやの神のみめぐみにして
眞心をこめて錬ひしたちこそは
亂れぬくにのまもりなりけれ
まごころをこめてならひし業のみは
年を經れどもわすれざりけり

今や、劃期的なる世界の大轉換期に際會し、萬法盡く維新の氣運に在り。斯くて「戰ひ」も亦、斷じて轉換せられなくてはならぬ。是れ前にも述べし如く、神望ませ給ふ所であり、萬人心中に希ふ所である。而して今次の大戰爭その終を告げ世界の新秩序が招來せらるる時こそ、正しく該轉換の契機たるものと思考する。乃ち現時の「戰ひ」は、それを促進する道程に外ならぬ。

その限り、そは、實に、飽迄も徹底的に遂行せられ、彼等の舊秩序を破碎しどこまでも元兇の邪心を殲滅し、全く改悛せしむるに到らねばならぬ。

斯くて、その戰ひ終結を見るとき、各國家・國民及び各國軍が、その心と目標とを轉回し、皆競ひ進んで、「善」の實現に向ひ邁進奮鬪するに到るであらう。在來の戰爭は茲にその終を告げ、世界は一轉して、漸次眞の樂土に轉換し、たのしき人生を現前するに到るべきは、逆睹するに難からぬ。そこに世界の諸國家に向ひ、正義と人類の福祉實現の爲め、一層の努力を要望せねばならぬ所以のものが嚴在する。

斯くて、それは重ねて云ふが左の一語に盡きる。

「まごころ」

國民戰陣訓

昭和十八年十二月十日初刷印刷
昭和十八年十二月十五日初刷發行（五、〇〇〇部）

定價一圓八十錢
特別行爲稅相當額五錢　合計一圓八十五錢

著者　中柴末純

發行者　堀内文治郎
東京都神田區三崎町二ノ二四

印刷者（東京三六）　堀内郁代
東京都牛込區山吹町一九八

製本者　橋本久吉
東京都神田區錦町三ノ一二

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

發行所　二見書房
東京都神田區三崎町二ノ二四
電話九段〇二二〇番
振替東京一七二九四八番

（出版會承認イ270304號）

日本出版會會員番號第三八五四號

著者略歷

明治三十年陸軍少尉に任じ大正十二年陸軍少將に任ず。大正十三年より昭和四年迄東京帝國大學文學部諸學科及法學部學科の一部を聽講す。爾後皇道學及び國防學の研究に專念す。

現在　豫備役、陸軍少將。總力戰學會會長。

著書

昭和の新理想と世界美化	昭和二年	寶文館
戰爭哲學	昭和三年	偕行社
皇道世界觀	昭和十七年	太陽堂
神武讀本	昭和十八年	太陽堂
國民戰陣訓	昭和十八年	二見書房

966
238

終